「イエス、洗礼を受ける」（ルカ三章一五～三八節）

1　憐れみ深い者となれ

二〇二一年、今日は最初の主日、礼拝をもってこの年を始めることができること、まことに幸いです。

コロナの中で礼拝の出席を控えている方もおられますし、病気療養その他で自宅以外のところで過ごしている人もおられます。そうした皆さんともご一緒にこの礼拝を始まりとして新しい年を歩み出したいと思います。

ローズンゲン（日々の聖句）が二〇二一年のために定めた「年の聖句」というのがあります。今年はルカによる福音書六章三六節です。三五節も含めて引用します。

あなたがたは敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そうすればたくさんの報いがあり、いと高き方の子となる。いと高き方は恩を知らない者にも悪人にも、情け深いからである。あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい（六・三五～三六）。

この最後のところ、「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい」（三六節）、これが「年の聖句」です。これを選ぶ委員会があって、じつは三年前に選ばれ発表されていたものです。選定は二〇一八年です。去年決めたのではありません。この委員会にはカトリック教会も入っており、世界の教会の叡智と祈りが集められています。

これが今年の聖句だということを私は昨年の暮、新しいローズンゲンを買って開いてはじめて知ったのですが、コロナで苦しめられ、いまなお出口の見えない中、神が私どもに与えてくださった、まさにこれこそ、しっかり受けとめるべきみ言葉だと直感したところです。

コロナのようなウィルスによる感染症はどういうところから起こってくるのか、あるいはどのようにしてこれを克服していくのか、もちろん多くの議論があります。先日も、ＮＨＫの番組で、キャスターをつとめた生物学者の福岡伸一さんが、現代のわれわれが、人間の自然性と言いますが、自然の一部であることを忘れ、便利さを追求し清潔すぎる文明をつくり上げようとしているところに根本の問題があるのではないかということを言っていました。人間がつくり上げてきた文明そのものが問われているように私も思います。

問題をそうした大きな文脈で考えて行くのも大切ですが、それだけでなく実際にこれ以上拡がらせない、犠牲者を出さない、被害を起こさないようにすることも大切ですし、すでにこのため困難に陥っている人があれば、機会をとらえて何らかの援助もしなければならないと思います。

そうした中で、年の聖句は、今年私どもがこれを導きとして歩むのに相応しい、必要なみ言葉です。

週録にも少し書いたように、父なる神は憐れみ深いとは、「恩を知らない者にも悪人にも情け深い」ことです。懐の深い、ひろやかな態度です。それはコロナ禍の中に

ある私どもへの慰めと励ましです。

それゆえ、神を信じて歩む者も、「憐れみ深い者となれ」とイエスは語り、勧めています。他人との距離をとるということが、いつのまにか共感や同情といったものを私どもから奪ってはいないでしょうか。マスクをしないなど、対策を怠っている人がいると、それはいまは本当に困りますけれど、必要以上に、かつて言われたような「自粛ポリス」になってしまっていないでしょうか。こういう時こそ、イエスから教えられているように、だれに対しても憐れみ深くあること、他人を隣人として自分と同じように大切に扱い、受け入れ、共に歩むこと、それを私どもは教会の重要な役割であると考えます。

いまコロナで苦しむ私どもに、まるで予見していたかのように神は今年このみ言葉を与えてくださいました。神が憐れみ深いように憐れみ深い者とあれ、これを心に刻んで歩んで行きたいと思います。

2　イエスの洗礼志願

さてルカによる福音書によって私どもはイエスを、キリスト（メシア）であるイエスを学びはじめています。

アドベントから先週までイエスの生まれる前に遡って書かれている第一章を私どもは取り上げました。イエスの誕生そのものを記している第二章は、今年は取り上げていません。今日からは、成長したイエスがガリラヤで宣教を開始した、その次第を追うことになります。

少し客観的に、学校の歴史の教科書に載っているような言い方をすれば、イエスとは、紀元前四年頃から紀元後三〇年ぐらいまで、パレスチナの一隅、ガリラヤとユダヤに生きた、そして最後に、ローマの官憲によって十字架刑に処せられた一人のユダヤ人です。

歴史の教科書は、十字架の死までしか言わない。とはいえそれは言わないわけには行かないことでもあります。それが歴史的な事実だからです。しかし聖書はその先まで語っています。イエスは死んで葬られたあと、三日目に甦って、甦った姿を、主として弟子たちに、四十日にわたり現され、その間弟子たちに最後の教えをなした上で天に昇られます。

イエスは地上にはいなくなります。しかし弟子たちは聖霊降臨（ペンテコステ）を経験し、伝道を使命とする教会を形成していきます。聖霊降臨とは、いまもあくまで天におられるイエスが聖霊としてこの世に戻ってきたと考えてもよいと思います。イエスはいまもなお私どもと共にいます。そう弟子たちは考え、またそれを、つねづね告白していたのです。

教会が、伝道のため、宣教のため、はじめユダヤ人の仲間に、やがで全世界の人に伝えた福音、メッセージは、イエスは、つまり先ほど言ったように生き死にしたイエスは神の遣わしたメシア、キリストであったということでした。イエスはその十字架の死と復活によって、人のすべての罪を贖い、それを信じて受け入れる人に神はそれがだれであっても救いを与え、永遠の命に至らしめるというものでした。それを福音として宣べ伝えたのです。

こうして福音が伝えられる中で、新約聖書が、とくに福音書ができていきます。イエスと一緒にイエスの弟子として伝道した者たちが、イエスの昇天のあとに、聖霊に導かれて、イエスについて語ったこと、証ししたこと、それがまとめられて福音書が生まれます。こうした証言がまとめられる過程をルカ自身が福音書のはじめに書いていました。

わたしたちの間で実現した事柄〔口語訳、成就された出来事〕について、最初から目撃して御言葉のために働いた人々がわたしたちに伝えたとおりに、物語を書き連ねようと多くの人々がすでに手を着けています。そこで、敬愛するテオフィロさま、わたしもすべての事を初めから詳しく調べていますので、順序正しく書いてあなたに献呈するのがよいと思いました。お受けになった教えが確実なものであることを、よく分かっていただきたいのであります（一・一～四）。

とても興味深い福音書の序文です。いまはしかし一つだけ「順序正しく書いて」という言葉に注意したいと思います。

この言葉のさし当たっての意味は、献呈の相手テオフィロ、彼は信仰の学びをしていたのでしょうか、彼の学びの助けとなるように整理して書くということです。そのためにも、イエスの「出来事」を事柄にふさわしい順序で記すことをしなければなりませんでした。

この福音書を書いたルカは、彼が伝えるイエスの出来事の始まり、換言すれば、この地上における神の救いの業の始まり、それをイエスの洗礼に見ています。洗礼者ヨハネから洗礼を受ける、これがすべての始まりであったと見て、そこからイエスのことを書き始めています。これが順序正しくということの意味です。

それはイエスが三十歳になったころでした（二三節）。三十歳といえば、一つの仕事を成し遂げるべくスタートするのにふさわしい年齢です。ダビデが王となったのも三十歳であったことを私どもは思い出します。

しかしちょうどその頃、じつはユダヤ全土が、そこに住むすべての人が、不安の中に突き落とされ、魂が震撼させられていたのです。民はもちろんのこと、王や宗教の指導者たち、それに兵士もみな、洗礼者ヨハネの説教に、すなわち、神の怒り、裁きは差し迫っている、悔い改めよ、神をお迎えするのにふさわしく生活をせよ、生き方を改めよという説教に激しく動かされていたのです。

このヨハネからイエスが洗礼を受ける、それがすべての始まりだと申しました。その通りです。しかしそれと共に私どもは、イエスがヨハネの説教に心揺さぶられ、ガリラヤを出て、ヨルダン川へと向かって行ったイエスの心の中に起こった、逆らうことのできない神からの促し、それに従うイエスの決意といったものに深く心を寄せざるをえないのです。

3　神の子イエスの歩み

なぜイエスは、そのような衝動にかられたのでしょうか。それに答えることは、できません。

それはそれとして、悔い改めのしるしとしての洗礼者ヨハネによる洗礼は、もしイエスが神の子であるなら受ける必要のないものではないでしょうか。彼は罪とはまったく無関係だからです。

このことを巡っての洗礼者ヨハネとイエスのやりとりがマタイによる福音書に記されています。それによると、ヨハネは、わたしのほうこそあなたから洗礼をさずけてもらわなければならないのにと言って、イエスの洗礼を思いとどまらせようとしています（三・一四）。

しかしイエスは、いまは受けさせていただきたいと言って、悔い改めのための洗礼を受けます。それは、罪人と一つとなって、人間の罪を自らのものとしてにない、人間として神に生きるということです。その生き方がメシアとしてのイエスの生き方なのです。イエスは人間を救うため洗礼を受け、私どもと同じところに立ち、神の子として歩み、メシアのわざを開始します。

民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた（二一～二二節）。

この箇所に、特別にイエスのために、天が開け、聖霊がイエスの上に降り、さらに天から声が聞こえたとあります。ただ私にとって興味深いのは、イエスも一人の洗礼受領者としていて、同じく洗礼を受けた民衆にまじって、祈っていたという情景、背景です。

イエスが私どもと同じ一人の人間として生まれ、洗礼を受けたということをいま申し上げています。今日の聖書箇所にある系図の書き方にもそれは現れています。「ヨセフの子と思われていた」（二三節）人間イエスの系図が、時間を遡って人類の始祖アダムまで行き、ついには神にまで辿られます。イエスは、全人類の一人として位置づけられています。

イエスは、洗礼者ヨハネの悔い改めの説教に、自らに対する神の招きを聞き取ったのです。ヨハネの洗礼にあずかって、徹底して人間の立場で神に生きるメシアとしての召しを受けたのです。神の子なんだから、何でもやれる、全能の力がある、人も救ってやろう、そんな生き方をイエスは志すことはしませんでした。「彼は罪人のひとりに数えられた」（イザヤ五三・一二、ルカ二二・三七口語訳）。イエスが洗礼を志願したところに、すでに十字架の死がきざしています。

イエスは、人間として、父なる神に、最後まで従順に歩み通しました。人間の罪をになって十字架の死に至るまで歩み通したのです。それが神のみこころにかなったことであったことはイエスがよみがえらされたことで明らかです。イエスの十字架の死と復活によって、神と人との関係は回復されたのです。イエスは私どもすべての人間のために、神の子として生きる道を開いてくださったのです。イエスを信じ、主として受け入れる人に、救いと命を勝ち取ってくださったのです。

（二〇二一・一・三）